

論考

近代日本における諸葛亮の評伝をめぐって

箱崎 緑

一、はじめに

日本で著述、出版された三国志の物語世界を描いた書籍は大変多く、特に、江戸時代以降は『通俗三国志』、第二次世界大戦以降は吉川英治『三国志』などが広く読まれ、三国志の魅力を伝えている。

しかし、三国志の物語世界を描いた文芸作品は小説だけではなく、漢文注釈書、詩、評伝などもあり、多様な広がりを持っている。中でも評伝は、様々な資料を組み合わせ、漢籍の内容を世間に広く示すとともに、著者の解釈も色濃く打ち出され、三国時代の個別の人物に人々の関心を集めるのに寄与してきた。

特に、明治から昭和初期には、諸葛亮についての評伝が多数出版され、日本における諸葛亮評価に変化を促し、三国志の物語世界にも影響を与えることとなった。

本稿は、明治から昭和初期に出版された諸葛亮についての評伝がどのような諸葛亮像を提示したか示し、評伝の系譜を紹介するとともに、これらの評伝が吉川『三国志』に与えた影響を例に、日本の三国志受容における評伝の重要性を指摘するものである。

二、評伝における諸葛亮

近代以降に出版された三国時代の人物の評伝としては、日本でも曹操、劉備、諸葛亮などの評伝が見られる。本稿で扱う、明治から昭和初期に出版された諸葛亮の評伝には、一八九七年に発行された内藤虎次郎『諸葛武侯』から一九四二年の太田熊藏『諸葛孔明傳』まで、少なくとも十作品がある。諸葛亮の評伝である宮川『諸葛孔明』、植村清二『諸葛孔明』、狩野直禎『諸葛孔明』は、先行する評伝に言及している。

(一) 内藤虎次郎『諸葛武侯』

近代日本における諸葛亮の評伝の嚆矢と言える内藤『諸葛武侯』は、内藤が一八九六年十二月に大阪朝日新聞を退社し、翌年四月に台湾日報の主筆として台湾に行くまでの間に執筆され、東華堂から一八九七年六月に刊行された。正篇は「一、侯が産地及び世系」「二、侯が生時、少時、及び躬耕の時」「三、草廬三顧、三分の策」「四、赤壁の戦」「五、益州據有」「六、漢中平定、荊州陥没、侯が前半生を總論す」「七、昭烈正統」の七章から成り、附録「諸葛武侯年譜」が巻末に載っている。正篇の最後には「續篇目次豫定」が示され、「八、秭歸敗師、托孤顧命」「九、南中平定」「十、六出伐魏、將星隕落」「十

一、侯が治國、用人」「十二、侯が制戎、逸事」「十三、侯が品性を總論す、并に其の兄弟兒子」「十四、侯に關する評論の沿革、及び勝蹟」と予告されている。後篇について例言では、伝記の中に前人の評論などを挿入したため、予定していた一篇分の紙幅が満ち、『諸葛武侯』では、前半生の記事までしか終わらなかったという。「斯篇は須く侯が草廬策對の一半を成功せる歴史として看るべく、他の篇は須く他の一半を敗闕せる歴史として看るべし。」とも述べており、「續篇目次豫定」があることも併せれば、内藤には後篇を出す計画があつたものの、実現しなかつたのだらう。

井波律子「日本人と諸葛亮」では、内藤『諸葛武侯』は、非常にアクトリアルな視点から書かれてしていると総括し、年齢差を強調する世代論がキーコンセプトだと説明する。また、井波は、諸葛亮評価が全面的な讚美に終始しているとも指摘する。雑喉潤『三国志と日本人』では、内藤『諸葛武侯』は、虚構を排し実像に迫る反演義的な論じ方をしているとし、人口推移から当時の情勢を考察し天下三分の計を現実的な世界政策だと示したことを高く評価している。また、井波同様、赤壁の戦いを重視し世代間闘争として捉えていることを指摘する。先行研究が挙げるこうした特徴は、内藤『諸葛武侯』の中で繰り返し返され、『三国志演義』的な戯画化された世界、理想化された諸葛亮像ではなく、現実に生きていた諸葛亮像に迫ろうとする印象を強めている。

そして雑喉は、内藤『諸葛武侯』は三国時代に取材した日本人初の長編エッセイであるため、歴史的意義が大きいとし、諸葛亮に関する出版物の先鞭をつけた業績も評価している。確かに雑喉の指摘通り、近代日本における諸葛亮の評伝の先駆けである内藤『諸葛武侯』に、その後、多くの作品が続くことになる。これら評伝の殆んどは形式だけを見ても、「概論」「三国時代及び諸葛亮の事績」「諸葛亮の逸話」

「諸葛亮に対する論評」という、「續篇目次豫定」も含め内藤『諸葛武侯』が示した構成要素を踏襲している。その後の評伝でも諸葛亮の事績を述べる際には、内藤『諸葛武侯』同様、三国時代の状況も解説されることが多く、「三分割據は諸葛亮の策に出でたるものなれば、其の傳を立つるに當りても、勢ひ三国相關の事實を説かざるべからず。故に本書は一面よりして之を見れば諸葛亮を中心としたる三国史なり。」「およそ人の傳記を書くには、その時代の背景を明かにする必要があるから、本書はこの點を充分記述した。そこで本書は一面から見れば、孔明を中心とした三国史のやうなものとも云へる。」などと説明される。

また、内藤『諸葛武侯』には、史書の中からより実態に近いエピソードを選択しようとする意識が見られる。例えば、草廬三顧について、『魏略』『九州春秋』の二書から諸葛亮が自分から劉備を訪問したという説を引いた上で、裴松之が弁じる通り、事実と違うだろうと判断を示す。さらには、陳寿が強いて諸葛亮を弁護しようとする者ではないことからしても、蜀志が近いだろうとしている。また、天下三分を説いた草廬策對については、以下のように、諸葛亮が発案した策そのままであることに疑いを挟む。

其言語に至ては、或は史氏の修飾を加へたるなきやを疑ふべき者あり、何となれば荊州此時、猶ほ劉表あり、而して其主守ること能はずといふは、正にかの豚犬の兒子劉琮を指すが如く、益州智能の士、明君を得んことを思ふといふは、張松等が昭烈を奉迎せんことを逆睹せるに似たり、武侯の明と雖も、其の指畫寧ろ太だ悉せるに過ぎざらんや、是れ其の成事によりて後より辭を修めたるを疑ふ所以なり。

さらに、「形勢に審らかなる者が荊楚に着眼するは、當時皆然りし若し^(二〇)」と、三分鼎立を考えていたのが諸葛亮だけではないとする。

こうした主張は、諸葛亮以外の人物への高い評価へと繋がり、特に魯肅を「俊傑^(二一)の見る所、是の如く其れ相符す、魯肅の識、眞に侮るべからざるかな。」かの魯肅が士大夫に驕るの雲長を撫輯して、其の同仇の好を失はざらんとする者、迂且つ怯に似て、實は大計に通ぜるを知るべし^(二二)」、侯が第一流人物の眼孔を以て、其の志尚器度を察し、而して能く意に中る者希なるに、獨り子敬^(二三)夔然として別調を出し、侯と意氣相投合すること極めて深き^(二四)」と、諸葛亮に並ぶ人物として賞賛する。魯肅は、『三国志演義』において諸葛亮と周瑜の間に立ち翻弄される道化的な役割を与えられているが、史実をベースにした魯肅への高い評価は、後の評伝にも明記される。

白河『諸葛孔明』は、劉備と孫権との同盟について「呉の魯肅は頗る識見に富みたり。」と書き出し、魯肅を中心に説明する。

杉浦・猪狩『諸葛亮』も内藤『諸葛武侯』の表現を踏襲し、「曹操は誤れり。彼能く張昭を知るも、未だ深く周瑜を知らず、玄德あるを知るも孔明あるを知らざるなり。〔…〕たゞ當時未だ多く世に知られざる孔明、魯肅等の有るありて、意氣壯烈彼の赤壁の大活劇を演出せんことは、操の明と雖も猶ほ之を知ること能はざりしや必せり。勝敗の機實に茲に在るか。」とする。

安岡「王佐の偉人 諸葛孔明」では、魯肅を「彼は、非常な讀書家であり、また文筆にも勝れ、政治家として人物識量遙かに衆に擢でて居た爲に、殊の他孫権に重んぜられていた。」と紹介し、「魯肅はまた孔明と會見して、兩雄の靈犀相通じた。」^(二五)「當時の英雄中此に至つては唯だ魯肅と孔明とあるばかりであつた。周瑜といひ、呂蒙といひ、

また關羽といひ、張飛といひ、兎角眼前の成敗に走つて遠識に乏しい。」^(二六)と、諸葛亮と並べて最高の評価を与えている。

このほか、内藤『諸葛武侯』が史書の検討や人口比較などで示した、根拠を重視しより正しい史料を見定めようとする姿勢は、続く評傳にも継承される。正閏論に代表される後世の評価を集める「諸葛亮に対する論評」はもとより、「諸葛亮の逸話」を語る際には、『三国志』『三国志演義』の以外の資料も渉獵され、著者独自の解釈が加えられる。白河『諸葛孔明』や宮川『諸葛孔明』など、典拠となる一次資料をはつきりと示すものもあり、後述するように小説の二次資料として活用されやすくなったと考えられる。

その他、内藤『諸葛武侯』の大きな特色としては、運命を強く意識していることが挙げられる。「天終に斯の英雄を棄てず、將さに一大食客をして轉じて帝王の業を成さしめんとす、是を以て武侯を以て斯人に授く。」とあり、劉備が諸葛亮という臣下を得たこと、諸葛亮が劉備という主を得たことを貴重なこととし、巡り合わせを重要視している。^(二七)

(二) 諸葛亮の偉人化

内藤『諸葛武侯』に続く諸葛亮の評伝のうち、大半は偉人傳シリーズのひとつとして出版された。安東『孔明』は、博文社の児童向け偉人伝「世界歴史譚」の第拾四編として、西脇編『諸葛孔明言行録』は、内外出版協會「偉人研究」の第二十九編として、杉浦・猪狩『諸葛亮』は、博文館の「偉人傳叢書」の第一冊として、宮川『諸葛孔明』は、富山房の「支那歴史地理叢書八」として発行された。^(二八)

また、雑誌でも、日本社が発行していた雑誌『偉人』では、「諸葛孔明」が第九卷第五号で選ばれ、安岡正篤の金雞學院が発行する『人

物研究叢刊』の第九に「諸葛孔明を憶ふ」^(三二)が採られた。

以上のように、近代以降、諸葛亮は偉人伝シリーズの一角を占めていたと言える。以下、諸葛亮が採られた偉人伝シリーズについて概説する。

当時の伝記児童文学及び、安東『孔明』が収められた海外伝記シリーズ「世界歴史譚」については、勝尾金弥の論考がある^(三三)。勝尾によれば、一八九八年に刊行が始まった博文館の「少年讀本」が、わが国最初の複数の著者による伝記児童書のシリーズ出版だという。「少年讀本」は日本の偉人が被伝者であったが、同じく博文館の「世界歴史譚」は、世界の偉人を採り上げている。「少年讀本」の刊行から三か月経ってスタートしており、姉妹編とも言える。

「世界歴史譚」は、一八九九年に刊行された高山林次郎『釈迦』を第一編とし、一九〇二年の第參拾六編、三好物外『ニュートン』まで刊行された。中華圏の人物は、第二編 吉国藤吉『孔子』、第七編 三浦菊太郎『漢高祖』、第九編 笹川種郎『岳飛』、第拾四編 安東俊明『孔明』、第拾八編 白河鯉洋『王陽明』、第廿三編 永井惟直『岳飛』、第廿四編 大田蒼溟『成吉思汗』の七人が採られており、シリーズの凡そ二割を占めている。

内外出版協會の「偉人研究」は、一九〇五年に刊行された畔上賢造『リンコーン言行録』を第一編とし、巻頭で「偉人研究」編著の趣旨は、偉人を研究して之を廣く人に分たんとなり。」とし、カーライルをひくなどしながら、世界歴史を知るため、真理を得るため、青年を鼓舞することなど、六項目を挙げて偉人研究の必要さ、有益さを説く^(三四)。「偉人研究」は、一九一三年の第八十編、福島成行編『乃木希典言行録』まで刊行され、日本と外国の偉人が共に収録されている。八十作中、日本の偉人が四十三人、外国の偉人が三十七人登場する。

そのうち中華圏の人物は、第二十九編 西脇玉峰編著『諸葛孔明言行録』に加え、第三十六編 北畠竹之助編著『司馬溫公言行録』、第四十九編 武安衛編著『孟子言行録』、第五十七編 渡辺芳雄編著『王陽明言行録』、第七十三編 尾池宜卿編著『文天祥言行録』の五人で、シリーズの一割に満たない。

博文館の「偉人傳叢書」にも、日本と外国の偉人が共に収録されている。一九一三年の杉浦・猪狩『諸葛亮』を第一冊とし、一九一五年の第十一冊、島田三郎、栗原元吉『ピット』まで確認することができ。『ピット』の巻末広告では、「偉人傳叢書」の十二冊として、池亨吉『ガンベッタ』が予告されているが、刊行を確認することはできなかった^(三五)。「偉人傳叢書」が採り上げるのは、諸葛亮、坂本龍馬、西郷南洲、奈翁と其元帥、豐太閤、ネルソン、熊澤蕃山、ビスマーク、吉田寅次郎、成吉思汗、ピット、ガンベッタである。

以上、見てきたように、偉人伝シリーズの中に他の人物と並んで諸葛亮が載っているが、他の三国時代の人物が取り上げられている例は見当たらない^(三六)。諸葛亮は、物語世界『三国志演義』『通俗三国志』の登場人物として日本でも親しまれていたが、虚飾を交えた物語から切り離され偉人伝の中で実在の人物の間に置かれることで現実感を取り戻し、実在した偉人として扱われるようになっていく。

一方、諸葛亮の評伝が偉人伝シリーズに不可欠とされていた訳ではなく、改造社の「偉人伝全集」^(三七)や金の星社の「世界少年少女偉人伝体系」^(三八)といった、諸葛亮が入っていない偉人伝シリーズも存在する。

以上のように、諸葛亮の評伝の嚆矢となった内藤『諸葛武侯』から太平洋戦争終結迄のおよそ五十年間に、諸葛亮を主題に据えた書籍が少なくとも十冊出されている。これらの多くは、内藤『諸葛武侯』が示した形式である、時系列による史実と、伝説も含めた事績、諸葛

亮の遺文、後世の評論などで構成されており、内容も内藤『諸葛武侯』の影響を受けている。さらに、こうした諸葛亮の評伝は、偉人伝シリーズの中に組み込まれる場合もあり、諸葛亮の偉人化、諸葛亮の評伝の刊行点数の増加に繋がった。

三、諸葛亮の評伝の展開

内藤『諸葛武侯』を嚆矢とする諸葛亮の評伝は、いくつかのタイプに分かれて展開を見せる。

(一) 研究者による評伝

内藤『諸葛武侯』では、先述した通り、歴史学者の目線で史料を基に内容を検討し、人口や年齢に注目するなど独自の分析を加えたが、後篇が執筆されなかったため、網羅的、体系的な著述に至らなかった。そこを補うように諸葛亮の評伝が続いていく。また、内藤『諸葛武侯』では、漢文がそのまま引用されており文語体で著述されているため、一般向けの書籍とは言い難いが、その後、平易な表現を用いた諸葛亮の評伝も刊行される。

史実に忠実であろうとする姿勢が強く滲む内藤『諸葛武侯』のスタンスを継ぐのは、宮川『諸葛孔明』である。^{三三}「序」で「私が本書を著はすに至った次第は、これら一般の常識の根據であり、歴史の研究にとつて價值ありと信ぜられる各種の史料に直接觸れて、この時代に生きた孔明の人となりを再現せんとすることである。それ故に興味においては少くなるであらうが眞實においては却つて益すものがあらうと思ふ。」^{三四}とし、史料に立脚した諸葛亮像を描くことを企図している。渡邊義浩によれば、宮川が京都帝国大学大学院在籍中に書いたもので、

執筆の背景には、東方文化研究所で六朝仏教研究資料の蒐集に従事していたことによる資料の読込みがあるとする。^{三四}

宮川『諸葛孔明』では、内藤『諸葛武侯』と同様の見解を見せる箇所もあるが、渡邊も指摘するように、諸葛亮が堅持した漢代的精神と、他の人士による貴族政治の対比が繰り返される。加えて、引用時には、漢文ではなく漢字仮名交じりの読み下し文が使われており、一般の読者も意識されている。

(二) 評伝の大衆化

研究者によるものとは別に、より広い読者に向けた諸葛亮の評伝も出された。シリーズの一つとして書かれたものを中心とした、史実に沿おうとした評伝と、それ以上に自らの思い入れが強く表れた評伝の二種に大別できる。前者のうち、刊行時期が比較的早い安東『孔明』は、漢文をそのまま引用するが、杉浦・猪狩『諸葛亮』や中川編『諸葛孔明』では、平易に読み下し文で書かれている。

一般向けの評伝の中で、史書をベースとした記述と、著者の思いとが組み合わされたものが、白河『諸葛孔明』である。あつさりとした印象になりがちな諸葛亮の評伝の冒頭に、大見出し「三國志は東洋の清華」から「孔明と曹操との争ひ也」「理想的人格としての孔明」まで、随筆風に自らの考えをはっきりと打ち出し、その見解を証明するように人物伝を重ねていく。白河は、曹操、諸葛亮の二人が歴史を造ったとし、三國時代の歴史は二人の衝突の記録だとする。^{四五}

また、「三主傳対照」では、ページを三つの枠に分け、劉備、曹操、孫権の対照表を示し、「家系図及び出身」「年齒」「容姿」「學問」「人物」及び其の事跡より見らるゝ性格一斑を、「將相謀臣舉用の方略」の六項目について細かい事績を記している。これは、「孔明を知らん

と欲せば、先づ三主を知らざるべからず。」と著者が考えたためである。諸葛亮の伝説についても、その声望の現われとしてまとまった量を引用し、典拠を明記している。白河『諸葛孔明』の多面的、網羅的な記述は、後述するように、『三国志演義』再話小説の資料としても使われることとなる。

その他、一般向けの評伝には、自らの気持ちを諸葛亮に仮託し、情熱を持って書かれたものが多い。

吾耻庵主人『我愛する偉人』は、一九一一年三月に敬文館から発行され、この時、作者は匿名であつた。^(四六)後に本名で再度刊行された際、著者の永田は執筆当時を振り返り、「本書は明治四十三年の夏僕が熊本警察部長をして居た時代の風潮に對して滿腔の不滿を抱いて東京より歸縣するや直ちに筆を執り一氣呵成に書き流したものである^(四七)」とし、自然主義、社會主義、官僚主義が癪に障つたため執筆に至つたと述懐している。諸葛亮に私淑しつつも、「決して孔明を傳せむと考へたのでは無い、孔明を藉りて自己の意思を發表せむ事を期待したのである^(四八)」(引用者注)著者は諸葛亮を(五〇)奮闘主義の人なり、職分を重んずるの人なり、公正の人なり、寡慾の人なりとして敬慕するのである、今一つの言ひたい事は孔明を意氣の人なりとして感心するのである^(四九)と、諸葛亮を通して社会や青年への希望を述べようとする。そのため、大げさな表現や同時代を嘆く表現が散見される^(五〇)。

安岡『諸葛孔明を憶ふ』では、「今聊か時世に感ずる所もあつて」刊行したとし、前赤壁の賦を引いて、以下のように熱い思いを吐露する。

舜韶聞くべからず、周禮行はれずして、空しく平和の名の下に荒怠淫蕩を恣にして居る今の時に、心ある者齊しく生命の鼓

動・感激の熱情を渴望して居る今の時に、料らずも三國の活劇を論じ、また赤壁の賦を憶ひ、幾多の英雄就中王佐の偉人諸葛孔明を説くことに、覺えず筆の慄へる愉快を感ずる^(五一)。

末尾でも「私は此處に一旦筆を擲たう。そして改めて深く讀者と共に、漢室の傾頽——群雄の成敗——人生の理趣を味はひたい。そはおのづから今を古鏡に映すものがあるではないか。」と、三国時代の事績を現在の参考にすべきだと熱を込めている。

太田『諸葛孔明傳』は、山水社から一九四二年に発行された。「序」によれば、元々非常時に何か遣りたいと思ひ執筆に取り掛かつていたが、宣戰の大詔によつて一氣呵成に筆を進めたという。第一章「序篇」では、日本で諸葛亮がいかに馴染み深い存在であつたかを振り返り、諸葛亮の人格を紹介して「眞に我國の先祖としか感じられない^(五二)」と述べている。第一章では、日本と諸葛亮のつながりを強調するが、第二章以降、史実を述べ、諸葛亮の遺事と評価をまとめる部分は、他の評伝と重なる^(五三)。

太田『諸葛孔明傳』では、諸葛亮を知ること中国の歴史の一端を知り、更には東亜に関する認識を深めることができるとする。これは、日中戦争、太平洋戦争中の一九四二年という時代を反映したものだろう。

「……孔明を知ること依つて、支那歴史の一端を知り、さらに東亜に関する認識を深めることになる。我が國は明治以來、歐米の物質文明のみに心酔し、東亜の文化を閑却するに至つたのは甚だ遺憾であつた。この際かくの如き誤れる思想を清算し、東亜に關する總ての文化を再現するは今日の喫緊事である。今

や大東亜共榮圏の確立は、日本民族に課せられたる一大責務であるから、それを遂行する一助としても、支那隨一の偉人諸葛孔明を知る必要があるのである。^(五五)

ここでは、諸葛亮が「支那隨一の偉人」とされ中国を代表する存在だと考えられており、大東亜共榮圏を作り上げるために中国理解が求められる中、諸葛亮が必要視されている。更に、支那の偉人である諸葛亮は「臣道実践と職域奉公に生き抜いた人物」^(五六)であり、和氣清麻呂、楠正成と並び、執筆当時の日本で検討すべき人物だとし、大東亜戦争で活躍する同胞に諸葛亮の精神を伝えたいとしている。

(三) 評伝の作者

このように、一般向けに書かれた評伝の中には、著者の想いが反映されたものや、時代の影響を強く受けたものが存在する。作者をみれば、内藤・宮川は東洋史学者であり、一般向けの評伝を執筆したうち、西脇^(五七)猪狩は教育者で、白河^(五八)は中国文学者、ジャーナリストであった。自らの心情を孔明に仮託する傾向が強い永田は警察部長、太田は弁護士と、文学と関係が薄い仕事に就いていた。教師であつた西脇は「序」で、為すべきところを尽くした点で諸葛亮を偉大だとし、言行録を編んで当時の青年に問おうとしたと執筆の理由を説明する。^(六二)また、永田は「歴史家は寫眞の様なものである、何もかも有の儘に寫せば好い、然るに英雄崇拜者は畫家の如きものである、惡を去りて善を採り醜を棄てゝ美を鍾め之を理想化して其の善美なる點を讚美すべきである」と、歴史家と立場が違ふ、英雄崇拜者としての自らの態度を明確にしている。

こうした作者の広がり、評伝の目的の変化を象徵する。事実在即

した諸葛亮像を描こうとした東洋史学者の評伝から、『三國志演義』の諸葛亮像も併せた自由なイメージで、理想的な人物である諸葛亮の姿を学生や社会全体に伝えようとするようになるのである。諸葛亮の評伝に、大衆化とともに、精神修養的、啓蒙的な性格が加わったと言える。

四. 小説の資料としての評伝—吉川英治『三國志』を例に

(一) 吉川英治旧蔵書『諸葛孔明言行録』との類似性
本章では、これまで見てきた諸葛亮の評伝と、吉川英治の小説『三國志』^(六三)の関連について述べる。

吉川は『三國志』執筆に際し、『通俗三國志』を中心に、村上知行『三國志物語』も参照していたと考えられており、これらは吉川の旧蔵書として、現在も吉川英治記念館に残されている。^(六四)さらに、吉川『三國志』には、『三國志演義』、『通俗三國志』及び村上『三國志物語』などに記述のないエピソードも散見されるが、その中のいくつかは、同じく吉川の旧蔵書である西脇編『諸葛孔明言行録』に類似箇所を求めることができる。

まず、諸葛亮の子、諸葛瞻に纏わるエピソードである。蜀志諸葛亮伝にある、諸葛亮が兄諸葛瑾に諸葛瞻について書き送った手紙の文面が、西脇編『諸葛孔明言行録』では「瞻今已に八歳、聰慧愛すべし、惟だその早成を嫌ふ恐らくは重器となるを得ざらんと。」^(六五)と紹介されているが、吉川『三國志』では、以下のように語られている。

且、瞻はたいへん才童であつたとみえ、建興十二年、呉にある兄の瑾に宛てゝ送つてゐる彼の書簡にもかう見える。

「瞻今スデニ八歳、聡慧愛スベシ、タゞ其ノ早成、恐ラクハ重器タラザルヲ嫌フノミ。」

彼は八歳の児を見るにさへ、国家的見地からこれを観てゐた。

また、「子を誠むる書」についても、吉川『三國志』で、「その年、孔明は征地に歿したのである。遺愛の文房のうちから、「子を誠むる書」といふのが出て来た。」と使われている。

以上の箇所を見れば、吉川の旧蔵書であることもあり、吉川が『三國志』執筆時に西脇編『諸葛孔明言行録』を参照した可能性を指摘できる。ただ、ここで例示した、諸葛亮が諸葛瞻について諸葛瑾に送った手紙と「子を誠むる書」は他の評伝にも見られるため、吉川が西脇編『諸葛孔明言行録』を参照したと断定することはできない。

(二) 吉川英治旧蔵書以外の評伝との類似性

吉川の蔵書である西脇編『諸葛孔明言行録』以外の評伝でも、従来指摘されてきた底本には見られない、吉川『三國志』によく似た箇所が確認できる。

まず、諸葛菜について確認しよう。吉川『三國志』では、以下のような逸話が紹介される。

彼が、軍を移駐して、或る地點から或る地點へ移動すると、かならず兵舎の構築とともに、附近の空閑地に蕪（蔓菁ともよぶ）の種を蒔かせたといふことだ。この蕪は、春夏秋冬、いつでも成育するし、土壌をえらばない特質もある。そしてその根から茎や葉まで生でも煮ても喰べられるといふ利便があるの
で、兵の軍糧副食物としては絶好の物だったらしい。

「……」で、この蔓菁の播植は、諸所の地方民の日常食にも分布されて、今も蜀の江陵地方の民衆のあひだでは、この蕪のことを「諸葛菜」とよんで愛食されてゐるといふ。

杉浦・猪狩『諸葛亮』には、「諸葛公が止むる所の兵士獨り蔓菁を種ゑて六つの利ありと爲す。三蜀江陵の人、今も蔓菁を呼びて諸葛菜といふ。」とあり、太田『諸葛孔明傳』に、次のようにある。

孔明は軍を移動して、ある場所に駐屯することになれば、必ず兵舎のまはりに蕪（蔓菁ともいふ）の種を播いた。蕪は四季を問はずぐ成育して根・莖・葉は生でも似ても食用に供し得る頗る便利なものである。もし軍が作戦上そこを引揚げる場合に、蕪をその儘に置いていつても、たかが野菜であるから、べつに惜むほどのものでもない。更にもとの場所に戻つて來ても見付けるに骨も折れず、すぐ採取することが出来る。軍が出先で蔬菜を得る法としては洵に面白い仕方である。今の蜀の江陵の人達は、この蕪を諸葛菜と呼んでゐるさうだ（劉禹錫嘉話録）。

この諸葛菜についての記述は、『三國志演義』や、従来吉川『三國志』の底本とされてきた『通俗三國志』、村上『三國志物語』など、また、他の評伝には見られない。吉川が太田『諸葛孔明傳』を参照した可能性が高いと言えよう。ちなみに、太田が劉禹錫『嘉話録』だとするこの逸話の典拠は、『太平広記』に求められる。

桓温の逸話も『三國志演義』及び従来の底本には見られず、殷芸『小説』を典拠とするが、吉川『三國志』では、以下の通り語られる。

蜀が魏に亡ぼされ、後又、その蜀を征して桓温が成都に入つた時代のことである。その頃、まだ百余歳の高齡を保つて、劉禪帝時代の世の中を知つてゐた一老翁があつた。

桓温は、老翁をよんで、

「おまへは、百余歳になるといふが、そんな齡なら、諸葛孔明が生きてゐた頃を知つてゐるわけだ。あの人を見たことがあるか」

と、たづねた。

老翁は、誇るが如く答へた。

「はい、はい。ありますとも、わたくしがまだ若年の小吏の頃でしたが、よく覚えてをりまする」

「さうか。では問ふが、孔明といふのは、いつたいどんなふうな人だつたな」

「さあ？ ……」

訊かれると、老翁は困つたやうな顔をしているので、桓温が、同時代から現在までの英傑や偉人の名をいろ／＼持出して、

「たとへば…誰みたいの人物か。誰と比較したら似てゐると思ふか」

と、かさねて問うた。

すると、老翁は、

「わたくしの覚えてゐる諸葛丞相は、べつだん誰ともちがつた所はございません。けれど今、あなた様のめらつしやる左右に見える大將方のやうに、そんなにお偉くは見えませんでした。たゞ、丞相がお歿なりになつてから後は、何となく、あんなお方はもう此の世にはゐない氣がするだけで御座います」
と、言つたといふことである。

この逸話は、杉浦・猪狩『諸葛亮』^(七八)、中川編『諸葛孔明』^(七九)、宮川『諸葛孔明』^(八〇)で紹介されている。

また、吉川『三國志』には、諸葛亮の祖先、諸葛豊について、以下のような逸話がある。

元帝の外戚にあたる者で、許章といふ寵臣があつた。これが國法の外の振舞をしてしかたがない。諸葛豊は、その不法行爲をにらんで、

「いつかは」

と、法の威嚴を示すべく誓つてゐたところ、或る折、又復、國法を紊して、恬として顧みないやうな一事件があつた。

「斷じて、縛る」

と、警視總監みづから、部下をひきつれて捕縛に向つた。ちやうど許章は宮門から出て來たところだつたが、豐總監のすがたを見て、あわてゝ禁門の中へかくれこんでしまつた。

そして、彼は、天子の寵をたのみ、袞龍の袖にかくれて哀訴した。しかも、豐は國法の曲ぐべからざることを説いてゆるさなかつたので、天子は却つて彼を憎み、彼の官職を没り上げて、城門の校尉といふ一警手に左遷してしまつた。

それでも、彼は猶、しばく怪しからぬ大官の罪をたゞして仮借しなかつた爲、つひにさういふ大官連から排撃されて、やがて免職をいひ渡され、ぜひなく郷土に老骨をさげて、一庶民に歸してしまつた人だとある。

この逸話の出典は『後漢書』で、白河『諸葛孔明』^(八一)、太田『諸葛孔明傳』^(八二)

にも見られるが、諸葛豊の左遷先を「城門校尉」と明記するのは内藤『諸葛武侯』と宮川『諸葛孔明』である。特に、宮川『諸葛孔明』の記述は、以下のように吉川『三國志』に似通っており、吉川がこの部分を参照した可能性が高いと言えよう。

天子の外戚に當る許章といふ廷臣の不法行爲を彈劾せんとし、會々道路で遭ひ、早速檢束しようとしたので許章は宮門に逃げこみ、天子に哀願して許しを乞うた。諸葛豊の過當な處置を憤つた元帝は彼を免官し、城門校尉に左遷したが、彼はその後態度を改めなかつたので老年に及び遂に庶人の身分におとされたといふ。^(八五)

上述した諸葛菜、桓温、諸葛豊の逸話は、『三國志演義』では描かれないものであり、諸葛亮像を多面的に描き人物像に厚みを与えるため、吉川が『三國志』の中に取り入れたものと考えられる。評伝が小説に変わる過程が窺えよう。

そして、吉川『三國志』には、白河『諸葛孔明』との類似が顕著に現れる箇所もある。例えば、吉川『三國志』に神格化された諸葛亮を紹介するため短いエピソードとその出典を挙げる次のような箇所がある。

——孔明の女は雲に乗つて天に上つた。それが葛女祠として祭られたものだ。「朝眞觀記々事」

——木牛流馬は入神の自動器械で、人の力を用ひず自で走つた。「戎州志」

——彼は時計も作つた。その時計は、毎更に鼓を鳴らし、三

更になると、鶏の聲を三唱する。「華夷考」

——孔明の用ひた釜は今でも水を入れるとひとりでにすぐ沸く。「丹鉛錄」

——孔明の墳のある定軍山に雲がおりると今でもきつと撃鼓の聲がする。漢中の八陣の遺蹟には、雨がふると、関の聲が起る。「干寶晉記」^(八六)

吉川『三國志』のこの記述は、白河『諸葛孔明』の「孔明傳餘屑」の小見出し「其の遺跡傳説に富むこと」という、複数の資料の出典を示しながら諸葛亮の神仙性を列挙する次の箇所とほとんど一致する。木牛流馬が「蜀記」か「戎州志」か、吉川『三國志』と白河『諸葛孔明』で出典がずれる部分も、引き写しの際の誤りだと考え得る範囲だろう。

「……」彼れの女が雲に乗りて天に上りしとて今に葛女祠ある《朝眞觀記》が如き、魏の刺客を看破し刺客も亦孔明を一見して戰慄して逸走せり《蜀記》といふが如き、木牛流馬は入神の自動器械なりし《前に擧ぐ》といふが如き、彼れの用ゐしと稱する銅鼓が殆ど無數にして之れを珍藏するもの甚だ多き《戎州志》が如き、「……」今の時計の如く毎更に鼓を鳴らし三更には鶏鳴の聲を三唱する鶏鳴枕といふものを作りし《華夷考》といふが如き、彼れの用ひし釜は今にても水を入れるれば直ぐに沸く《丹鉛錄》といふが如き、「……」ただし、定軍山に天陰れば猶ほ撃鼓の聲を聞き、《前に擧ぐ》漢中の八陣蹟は、今に鼓甲の聲あり、陰雨のときはいよく響くといひ、干寶晉記「……」^(八七)

さらに、吉川『三國志』が引く「談叢」「琴経」「歴代名書譜」も、^(八八)

白河『諸葛孔明』にその内容と出典が見られる。^(八九) 吉川『三國志』は、二次資料として評伝を用い出典を明記することで、諸葛亮の口碑伝説が様々な形で広まっていたことを印象付けようとしたのではないだろうか。

続いて、「偉大なる平凡人」というフレーズについて検討したい。白河『諸葛孔明』の小見出しとしても使われている「偉大なる平凡人」というフレーズは、吉川『三國志』にも登場する。^(九〇)

だが、こゝでもう一言、私見をゆるしてもらへるなら、私はやはりかう言ひたい。仲達は天下の奇才だ、と言つたが、私は、偉大なる平凡人と稱へたいのである、孔明ほど正直な人は少い。律義實直である。決して、孔子孟子のような聖賢の円満人でもなければ、奇矯なる快男兒でもない。たゞその平凡が世に多い平凡とちがつて非常に大きいのである。^(九一)

白河『諸葛孔明』の「偉大なる平凡人」では、誰もが孔子のような修養勉強を積みば孔子たり得ることから孔子を「平凡なる偉大人」だとし、それに似たもので、諸葛亮は尋常平凡でありながら普通人と大小において差があるとする。先に述べた桓温の逸話などを引きつつ、諸葛亮が謹慎・忠誠・儉素の三事を自らに許したとし、この三事があれば十分だが、それを備える者は少ないことから、諸葛亮を最も偉大なる平凡人だと結論付けている。^(九二)

吉川が『三國志』の末尾に置いた「偉大なる平凡人」だという諸葛亮像は、白河『諸葛孔明』の記述に近く、その主張を簡単に紹介したものとも言える。吉川『三國志』執筆時に、白河『諸葛孔明』を資料として参考にしたと見るのが自然だろう。^(九三)

以上、本章で見えてきたように、吉川『三國志』執筆時に吉川は、諸葛亮の逸話から太田『諸葛孔明傳』、また、桓温の逸話と諸葛亮の左遷後の官職双方を載せる宮川『諸葛孔明』、そして、伝説の出典や諸葛亮に対する表現が似通っている白河『諸葛孔明』、少なくともこの三冊を参照していた可能性が高い。

(三) 吉川『三國志』執筆時の資料

現在確認できる「三國志」関連の、吉川英治記念館所蔵の吉川の蔵書には、以下のものがある。

月の舎秋里編述『通俗絵本三國志』^(九四)

永井徳鄰『通俗演義三國志』（須原屋茂兵衛等、一八七七年）

博文館編輯局校訂『校訂通俗三國志』上下（博文館、一八九三年）

西脇玉峯編『諸葛孔明言行録』（偉人研究 第二九編、内外出版

協會、一九〇八年）

三浦理編『通俗三國志』上中下（有朋堂書店、一九一二年）

村上知行『三國志物語』第一巻〜第三巻（中央公論社、一九三九

〜一九四〇年）

このうち、『通俗絵本三國志』には多くの書き込みが見られるが、吉川の筆跡ではないようなので、前の持ち主によるものと考えられ、吉川が読書用もしくは資料として古書を集めていたことが窺える。吉川の連載開始の凡そ三十年前に出版された西脇編『諸葛孔明言行録』も残っていることから、吉川の蔵書に一九一一年に刊行された白河『諸葛孔明』が入っていたと考えることもできる。

また、吉川は、村上『三國志物語』を執筆の参考にしていた。同じく『三國志』連載中に刊行された諸葛亮の評伝、太田『諸葛孔明傳』、宮川『諸葛孔明』が吉川の目に触れていた可能性も高い。

現在は所蔵されていない本章で論じた評伝、白河『諸葛孔明』、太田『諸葛孔明傳』、宮川『諸葛孔明』などは、古書、新刊書を含む吉川の蔵書の傾向から見て、蔵書に含まれていてもおかしくない上、現在は散逸したとも考えられる。『三國志』執筆に際し、吉川は、古書・新刊書を問わず、何冊もの資料を幅広く収集し、資料として活用していたのだろう。『三國志』と並行し『新書太閤記』、時期によっては『源頼朝』『梅里先生行状記』と新聞連載を三本抱え、さらに雑誌の連載物、短編小説も執筆していたという吉川の忙しさから考えれば、漢文の読解力があつたとしても、原典を読み込む時間的余裕があつたとは考えにくい。吉川は、厳しい時間の制約がある中で、漢籍ではなく口語体など読みやすく書かれた評伝を参考に、『三國志演義』以外に見られる諸葛亮像を作品に取り入れたと考えるのが自然であろう。

五・まとめ

本稿では、明治から昭和初期に出版された諸葛亮についての評伝を紹介した。これらの評伝の記述は漢籍に基づくものも多く、従来は研究者や知識人だけのものであつたが、虚構を排し史実に忠実で、かつ読みやすい形の評伝として語り直されることで、漢籍以上に多くの人の目に触れることとなった。

さらに、吉川英治は『三國志』執筆に際し、諸葛亮像を豊かに描いたり、記述にリアリティや信憑性を与えたりするため、本稿で紹介したような評伝の内容を資料として自らの小説に取り込んだ。吉川『三國志』に引用されることで、これらの評伝に含まれる内容もより広く人口に膾炙するようになったと言える。

『三國志』、『三國志演義』に関連する書籍は小説に留まらず、日

本においても大きな広がりを持つ。三國志関連小説の底本について検討する際、こうした評伝のような二次資料を、直接、間接的に活用した可能性も考慮する必要がある。

史書から歴史小説を書く際、読みやすく資料が集められ、人物評も含む評伝は、貴重な種本となる。歴史と文学の中間に、人物評というジャンルがあり、明治以降、盛んに執筆、出版されていた。これらの評伝の流れを汲み、換骨奪胎し、独自の作品として提出したという点において、吉川『三國志』も、先行する評伝とともに、評伝文学の流れにあるとも言える。史書と歴史文学の間に評伝文学があるということが、より意識されるべきであろう。

《注》

(一) 本稿では、『三國志演義』や史書『三國志』を含み、広く三國時代に纏わる言説を指す場合は『三國志』と表記する。陳壽撰、裴松之注『三國志』一五(中華書局、一九七五年)、毛宗崗評、禹克坤・趙祖漢・李庆榮注『三國演義』上下(同心出版社、一九九五年)、博文館編輯局編『通俗三國志』第一・六卷(博文館文庫一五三・一五八、博文館、一九四〇年)をそれぞれ参照した。

引用文中の括弧は原文により、引用者による括弧書きは注記した。ルビ及び傍点は原則として省略した。

(二) 井上新一郎編『支那小説譯解』第十一號(東海義塾、一九〇〇年)、久保天隨『三國志演義』(支那文學評釋叢書第一卷、隆文館、一九〇六年)など。

(三) 土井晩翠の『星落秋風五丈原』が名高い。初出は『帝國文學』一八九八年十一月号。翌年、土井晩翠の第一詩集『天地有情』(博文館、一八九九年)に収められた。

(四) 松本一男『曹操・悪役の人生論 野望を抱き、したたかに生きよ』(PHP

研究所、一九九四年）、石井仁『曹操 魏の武帝』（新人物往来社、二〇〇〇年）など。

(五) 守屋洋ほか『劉備』『三国志』随一の徳望をもつ男』（プレジデント社、一九九〇年）、桜井信夫『劉備・関羽・張飛 三国志「蜀」の三英雄』（講談社火の鳥伝記文庫八四、講談社、一九九三年）など。

(六) 本稿では、諸葛亮の生涯の事績及び逸話を主題に据えた以下の書籍を扱う。

一 内藤虎次郎『諸葛武侯』（東華堂、一八九七年）

二 安東俊明『孔明』（世界歴史譚第拾四編、博文社、一九〇〇年）

三 西脇玉峰編『諸葛孔明言行録』（偉人研究第二十九編、内外出版協會、一九〇八年）

四 吾耻庵主人『我愛する偉人』（敬文館、一九一一年）

五 白河鯉洋『諸葛孔明』（敬文館、一九一一年）

六 杉浦重剛・猪狩又蔵『諸葛亮』（偉人傳叢書第一冊、博文館、一九一三年）

七 安岡正篤『王佐の偉人 諸葛孔明』（『東洋思想研究』第拾貳冊、一九二四年）

八 中川重編『諸葛孔明』（『偉人』第九卷、第五号、日本社、一九三〇年）

九 宮川尚志『諸葛孔明』（支那歴史地理叢書八、富山房、一九四〇年）

十 太田熊蔵『諸葛孔明傳』（山水社、一九四二年）

以下、著者姓「書名」と略記する。

これ以前、江戸時代には、『三国志』『蜀志諸葛亮伝』に注釈をつけた田寛注『諸葛孔明傳』（和泉屋古兵衛ほか、一八二九年）が出されている。

(七) 内藤『諸葛武侯』、西脇編『諸葛孔明言行録』、杉浦・猪狩『諸葛亮』、安岡「王佐の偉人 諸葛孔明」に言及する（宮川『諸葛孔明』四〇五ページ）。

ちなみに、宮川が「戦略に關する叙述や論斷において特に信頼できる」

（同上）と述べる大場彌平『秋風五丈原』（中央公論社、一九三九年）は、前半は「漢楚軍談」で、後半が史書『三国志』を基に構成した歴史物語「秋風五丈原」となっている。「秋風五丈原」は、諸葛亮を主題としたものではないため、今回は扱わない。

(八) 植村清二『諸葛孔明』（グリーンベルト・シリーズ三九、筑摩書房、一九六四年）、一三四ページ。

(九) 狩野直禎『諸葛孔明』（人物往来社、一九六六年）、二七一～二七二ページ。

(一〇) このほかに、中林史朗『諸葛孔明語録』（中国古典新書統編四、明德出版社、一九八六年）、渡邊義浩『諸葛亮孔明 その虚像と実像』（新人物往来社、一九九八年）などを参照した。

(一一) 内藤乾吉「あとがき」「内藤虎次郎『内藤湖南全集 第一卷』（筑摩書房、一九七〇年）、六八八ページ。

(一二) 今後、諸葛亮の史跡に至った場合、後篇で補いたいと言う（内藤『諸葛武侯』四ページ）。

(一三) 井波律子「日本人と諸葛亮」『月刊しにか』（大修館書店、一九九四年四月号）、六二～六七ページ。

(一四) 曹操が、劉備の動向を気にしていた一方で、諸葛亮や魯肅、周瑜を知らなかったと繰返し、曹操と諸葛亮等の年齢差を強調する。「孟徳が先づ劉表撃つ所以、劉表を撃つは、則ち其の一代の大敵手たる昭烈を撃つ所以なり。」

（内藤『諸葛武侯』九〇ページ）、「吾が友呂泣嘗て曰く、凡そ所謂更始革命、一切世局の動盪は、只是れ少者と老者との争闘のみと、今三國鼎峙の大關鍵たる赤壁一戦を觀るに、亦此語の易からざるを見る、此時武侯は年二十八、魯肅は三十七、周瑜は三十四、張昭は五十三、曹操は五十四、昭烈は四十八なり」（同一〇六ページ）、「是れ明らかに少壯者が羸着にして、老大者が輪着たるを示せる者。」（同一一一ページ）、「引用者注・曹操は」敵の劉備たるを知り、而して三少年（引用者注・周瑜、魯肅、諸葛亮）たるを知らず」（同一三〇ページ）など。

(一五) 雑喉潤『三国志と日本人』（講談社、二〇〇二年）、一一二～一二二ページ。

(一六) 杉浦・猪狩『諸葛亮』、一ページ。

(一七) 太田『諸葛孔明傳』、三ページ。

(一八) 内藤『諸葛武侯』、三十三～三二二ページ。他にも、「（引用者注・龐統の登用が遅れたのは鳳雛の噂を聞いていなかったためとし）襄陽記の説、鳳雛の語は、並びに頗る信じ難し」（同一四〇ページ）などがある。

- (二六) 同上書 三五～三六ページ。
- (二〇) 同上書、三六ページ。
- (三二) 同上書、六八ページ。漢室について二人の見解が違うのは、孫氏、劉氏それぞれのために謀ったためだとしている。
- (三三) 同上書、一七二～一七三ページ。
- (三三) 白河『諸葛孔明』、一三三ページ。
- (三四) 「但だ時局の變は、曹公の多智も之を審かにするを得ざる所あり、彼れ張紘張昭を料り、昭烈羽飛を料る、而して武侯瑜肅を料る能はず」(内藤『諸葛武侯』、九一ページ)。
- (二五) 杉浦・猪狩『諸葛亮』、六五～六六ページ。
- (二六) 安岡「諸葛孔明を憶ふ」、二二ページ。
- (二七) 同上書、二三ページ。
- (二八) 同上書、二六ページ。
- (二九) 内藤『諸葛武侯』、二九ページ。
- (三〇) 例言でも、鎌倉で源実朝の不遇を思い、諸葛亮も王佐の才を発揮するためには、劉備に会うことが必要だったとし、劉備がいなければ農民の俚不遇だったかもしれないと思いを馳せている(同上書、四六ページ)。
- (三一) 宮川『諸葛孔明』が収められている富山房の「支那歴史地理叢書」は、偉人伝の叢書ではなく、東亜について知ること、一般的読み物として権威ある学説を提供することを目標としている(羽田亨「支那歴史地理叢書の刊行に就いて」[宮川『諸葛孔明』、一四ページ)。
- (三二) 安岡「諸葛孔明を憶ふ」(人物研究叢刊第九、金雞學院、一九三〇年)。
- (三三) 安岡「王佐の偉人 諸葛孔明」は、安岡が建てた東洋思想研究所の機関誌『東洋思想研究』の一九二四年に出された第貳冊で、頒布し終えてからも要望が多かったため、新たに修正し附録として語録抄をつけて一九三〇年に刊行したものが「諸葛孔明を憶ふ」である。
- (三三) 勝尾金弥『伝記児童文学のあゆみ——一九九一から一九四五年——』(Minerara 二一世紀ライブラリー五五、ミネルヴァ書房、一九九九年)、五四、九八～一四九ページ。同「伝記叢書『世界歴史譚』の著者たち」(児童教育学科編、愛知県立大学文学部紀要委員会編『愛知県立大学文学部論集』(通号三七号)、一九八八年、七五～九一ページ)。

安東俊明は、一八七〇年生まれ、東京帝国大学の法科大学法律学科出身弁護士で、後に安藤と改姓した（同八九ページ）。

(三) 畔上賢造『リンコン言行録』(偉人研究第二編、内外出版協會、一九一二年)、一五ページ。

(三) 島田三郎、栗原元吉『ピット』(偉人傳叢書第十一冊、博文館、一九一五年)、三四三ページ。

(三) 何故他の人物ではなく諸葛亮が人気を博したかについて、井波は、江戸時代には冷静に見られていた諸葛亮のイメージが、明治になると一気に悲劇的美を帯びるとし、変化のきっかけとして、一八九八年に発表された土井

晩翠の『星落秋風五丈原』を挙げる。土井が諸葛亮を悲劇の愛国的英雄として浪漫的に描いたことで、明治という国家主義的な時代精神に合う諸葛亮イメージが生まれ、人気を支えたとする（前掲井波「日本人と諸葛亮」、六二・六五ページ）。諸葛亮だけが評伝に採り上げられた理由も、一つはここにあると思われるが、土井の『星落秋風五丈原』の前年という早い段階で内藤「諸葛武侯」が出された意味も大きかったのではないだろうか。

(三七) 改造社の『偉人傳全集』は、菊池寛『ナポレオン伝』(偉人傳全集第一卷、改造社、一九三一年)から刊行が始まり、偉人伝二三巻と、別巻の二四巻、松本亦太郎『偉人論及偉人研究』(偉人傳全集第二四巻、改造社、一九三五年)から成る。日本と外国の偉人を扱うが、時代が近い人物が多く、中華圏からは、孫文が選ばれている。

(三) 金の星社の『世界少年少女偉人傳体系』は、大木雄三・ジャンヌ・ダルク(『世界少年少女偉人傳体系第一巻、金の星社、一九二六年』)から刊行が始まり、外国の偉人を中心に日本の偉人も交え、立石美和『自動車王フオード』(『世界少年少女偉人傳体系第十七巻、金の星社、一九三〇年』)までと、別巻として金の星社編輯部編『明治大帝』(『世界少年少女偉人傳体系別巻、金の星社、一九二九年』)が確認できた。中華圏の人物は選ばれていない。

卷末の広告では、「物語にはだたためでもいゝから面白くさへあればいゝものと、何處から何處まで本當の事を調べ、その上面白みが充實してゐるものとあります。本体系は勿論後の方です。偉人英雄の傳記に假令一字一句のだたためもあつてはなりません。本社の偉人傳が他の類本に比べて、數倍社會に迎へられてゐるのもこの點に留意したからです。」(立石美和『自傳』)

- 動車王フオード』一七八ページ」と誇っている。虚構を排する姿勢が、物語の登場人物という印象が強い諸葛亮を選択しなかった理由かもしれない。
- (三) この他、研究者による著述には、桑原臨藏『東洋史説苑』(弘文堂書房、一九二七年)の「支那史上の偉人(孔子と孔明)」、中山久四郎『支那の人文思想』(春秋社、一九三二年)の第六章「諸葛孔明と日支の國體」、市村瓚次郎『支那史研究』(春秋社、一九三九年)の「諸葛亮傳」がある。
- (四) 宮川『諸葛孔明』一ページ。
- (四) 渡邊義浩「解説 諸葛孔明の漢代的精神―悲劇か理想か」『宮川尚志「諸葛孔明」「三國志」とその時代』(講談社学術文庫、講談社、二〇一一年)、二七〇～二七六ページ。
- (四) 天下三分の計について「廿七歳の一青年の世を知らぬ壯語と見るよりは、かかる觀察は荊州人士の一致した意見ではなかつたか」(宮川『諸葛孔明』三三ページ)とする、三國の国力を統計から比較する(同一三三ページ)など。
- (四) 貴族政治や名望への言及は、「引用者注…徐庶が劉備に諸葛亮を訪問するよう勧めたのは」諸葛氏の社會的勢力をおもんばかつたものであらう。」(同上書、三〇ページ)、「武力や財力も必要ではあるが、社會的勢力である名族と協力しないと政權を樹立できない。諸葛氏は一族が全土に広まって、世人の尊敬を博していた当時の有力貴族である。」(同三五ページ)、「如何にも當時の地方豪族の保護安民を第一とする氣慨なき態度が伺はれる。且つ曹操が名義上漢の丞相を稱して天下に號令したことが、いかに地方軍閥に對して精神的威壓を與へ得たかが分ると思ふ。」(同三八ページ)、「然し考ふべきは魯肅はむしろ劉備の系圖を重んじたのではないか。」(同五六ページ)、「呉に於ける消極主義は主として江南の土地所有者たる豪族により支持された。」(同五七ページ)、「即ち漢の正統主義を爭つて、單に軍事・經濟上の戰爭ではなく、理念上の絕對に兩立を許さざる劇しい闘争が、劉備によつて曹操に對して開始され、劉備亡き後孔明が幼主を輔翼してその志業をついで壯烈無比に敢行されるのである。」(同八一ページ) など多数。
- (四) 白河『諸葛孔明』十～十一ページ。
- (四) 同上書 六九ページ。
- (四) 一九二〇年三月に、改題され執筆者も本名になり、永田秀太郎『我愛する偉人諸葛孔明』(敬文館、一九二〇年)として再度出された。吾耻庵主人『我愛する偉人』と本篇はほぼ同じで、違いは、「序」の後に「改題に就て」が、本篇の末尾の杜子美の七言絶句に続いて程伊川作の七言絶句が、さらに本篇の後に一九二〇年二月の稿とされる「エバミノンダスと諸葛亮」が追加されている点である。
- (四) 永田秀太郎『我愛する偉人諸葛孔明』一ページ。
- (四) 同上書、三ページ。
- (四) 同上書、一三ページ。
- (五) 「我は諸葛亮が劉備に事ふるに至つた徑路を懷ふ度にホンに涎を流すばかりに羨ましく、又身の毛の立つ程の美しさを感じる。」(吾耻庵主人『我愛する偉人』五一ページ)、「凜乎たる其氣、牢乎たる其心、これが尋常一様のハイカラ才子に出来る事では無い」(同四二二ページ)、「敗に處するの彼が苦心と用意とは是亦後世爲政治家の鑒と爲すべきものであらう、之を思ふと夫の朝に在りて失敗し野に下つて忽ち傲語する立憲治下の政治家の責任なるものは洵に氣樂なものとなはねばならぬ。」(同四四四ページ)、「此感激の二字は決して尋常一様の安っぽい感激では無い、實に鞠躬盡瘁死而後已と迄に思ひ込ましめた感激である、亮の霸氣亮の生命は洵に此感激の二字に存するのである」(同二六三ページ) など。
- (五) 安岡「諸葛孔明を憶ふ」、二二二ページ。「王佐の偉人 諸葛孔明」では、「幾多の英雄就中王佐の偉人 諸葛孔明を偲ぶのも大丈夫好箇の消閑ではあるまいか。」(同五五ページ)と表現が抑えられており、再刊の際に表現が膨らんでいる。
- (五) 安岡「諸葛孔明を憶ふ」、三〇ページ。
- (五) 太田「諸葛孔明傳」、一ページ。
- (五) 現在、太田熊藏の蔵書を含む「太田文庫」が亜細亜大学図書館に所蔵されており、白河『諸葛孔明』と村上知行『三國志物語』第一～第三卷(中央公論社、一九三九～一九四〇年)が残されている。「太田文庫」の白河『諸葛孔明』には、全篇にわたって傍線、チェック記号と執筆メモが、村上『三國志物語』の「序」と目次、附録『三國志演義』に就て」には、傍線とチェック記号が書き込まれている。このことから、太田が『諸葛孔明傳』

を執筆する際に、先行する諸葛亮の評伝、白河『諸葛孔明』及び、同時代の村上『三國志物語』を参照し、中でも白河『諸葛孔明』に比重を置いていたことが窺える。

(五) 太田『諸葛孔明傳』、十三ページ。

(五) 同上書、十ページ。

(五七) 近代デジタルライブラリーの西脇玉峰『中等漢文法』（文芸社、一九一五年）には、著者名の上に「京華中学校講師」と（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/985803>、四〇七、二〇一四年二月九日閲覧）、同じく西脇玉峰『漢文学び方の研究 受験参考 附・入学試験問題詳解』（日進堂書店、一九一九年）には、「此の著者は京華中学校の漢文教師です。漢文の大家であります。」と書き込まれている（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/925191>、三〇マ、二〇一四年二月九日閲覧）。

(五八) 「猪狩史山（又蔵）は、福島県の出身で、明治二十三年に開設されたばかりの東京大学院（佐々木高美院長）の哲学科に入学し、二十六年に卒業するまで、その教頭であった杉浦に教えを受けた。二十七年から日本中学校教諭となり、歴史と英語を教えるとともに校長としての杉浦を扶けた。杉浦が倫理御進講御掛を委嘱された時には、最初にその相談を受け、また、その補助員となることを要請された。〔…〕老子・莊子の優れた研究者であるが、自著『諸葛亮伝』（大正二年刊）を杉浦と合著にする程、杉浦の思想を継承し、その流布に努めた第一人者である。昭和二年四月から十七年四月（七十歳）までは、日本中学校第二代校長杉浦真鉄（長男）の後を受け継いで、第三代目の校長となり、杉浦精神による日本中学教育の発展に尽くした。」（村田昇「解説」『杉浦重剛先生顕彰会「杉浦重剛先生」』〔思文閣出版、一九八六年五月二十日復刻〕、七八九～八一四ページ）、七八八ページ）。また、大竹秀一『天皇の学校 昭和の帝王学と高輪御学問所』（文藝春秋、一九八六年）にも猪狩についての記述がある（同一八七～一九二ページ）。

(五九) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』（第七巻、吉川弘文館、一九八六年、七三七～七三八ページ）。

(六〇) 太田熊蔵は亜細亜大学初代学長太田耕造の兄で弁護士（「亜細亜大学平成二十四年度図書館年報」<http://www2.asia-u.ac.jp/~libquest/stackdata/>

'src/sc667/aulibrary_annualreport2012.pdf'、二〇一四年二月九日閲覧）。

(六一) 西脇編『諸葛孔明言行録』、四ページ。

(六二) 永田『我が愛する偉人』、八ページ。

(六三) 吉川英治『三國志』、『中外商業新報』一九三九年八月二十六日夕刊～一九四二年十月三十日夕刊、吉川英治『新編三國志』、『日本産業経済新聞』一九四二年十一月三日夕刊～一九四三年九月五日夕刊。『中外商業新報』の合併によりタイトルが変わっているが、単行本では『三國志』という題名で纏められているため、本稿もそれに倣う。また、『中外商業新報』の他にも、『名古屋新聞』『小樽新聞』『台湾日々新報』『京城新報』に掲載されている。

(六四) 吉川英治の旧蔵書とその書き込みなどについて詳しくは、拙稿「日本における『三國志演義』の再話——日中戦争期の『三國志』ブームを中心に——」（『三國志研究』第七号、二〇一二年）参照。

(六五) 梶田は、吉川版に『三國志』及び『三國志演義』に見られない箇所があると指摘する（梶田郁一「吉川英治『三國志』の原書とその文学性——近代日本における『三國志』の受容と展開」〔『三國志研究』第八号、二〇一三年〕、一一九ページ）。

(六六) 西脇編『諸葛孔明言行録』、一九五ページ。

(六七) 吉川『三國志』、一九四三年八月二十六日夕刊。

(六八) 長澤規矩也編『和刻本漢籍文集 第一輯』（汲古書院、一九七七年）、二三ページ。諸葛亮撰、朱璣編『諸葛丞相集』（明治初年長門蔵版局刊本）を複製したもの。

(六九) 吉川『三國志』、一九四三年八月二十六日夕刊。これは、西脇編『諸葛孔明言行録』二〇六～二〇七ページにもある。

(七〇) 諸葛亮が諸葛瞻について諸葛瑾に送った手紙は、中川編『諸葛孔明』、八ページにもあり、諸葛瞻についての手紙と「子を誠むる書」を併せて紹介するものに、白河『諸葛孔明』二七二～二七三ページ、杉浦・猪狩『諸葛亮』二二〇～二二二ページ、宮川『諸葛孔明』一七二、一六三ページ、太田『諸葛孔明傳』二五二～二五三ページがある。

(七一) 吉川『三國志』、一九四三年八月二十八日夕刊。この日の連載分は、本来「諸葛菜八」だが、現在は「諸葛菜七」に改められ、一九四三年八月二

七日夕刊に掲載された回は削除されている。

- (七二) 杉浦・猪狩『諸葛亮』一三四～一三五ページ。
- (七三) 太田『諸葛孔明傳』、二二七ページ。
- (七四) 李昉等奉勅撰『大字斷句／太平広記』（掃葉山房印行、一九三三年）、巻四百十一、三十二ウ。
- (七五) 殷芸編纂、周楞伽輯注『殷芸小説』（中国古典小説研究資料丛书、上海古籍出版社、一九八四年）、一六六ページ。
- (七六) 全集では、「後また、その魏を征して」と変更されている（吉川英治『吉川英治全集二七 三国志（四）』（講談社、一九八〇年）、三九九ページ）。
- (七七) 吉川『三国志』一九四三年八月二八日夕刊。
- (七八) 杉浦・猪狩『諸葛亮』、一三四ページ。
- (七九) 中川編『諸葛孔明』、下段三三三ページ。
- (八〇) 宮川『諸葛孔明』、一六二～一六三ページ。
- (八一) 吉川『三国志』一九四一年七月二七日夕刊。
- (八二) 白河『諸葛孔明』、一〇六～一〇七ページ。
- (八三) 太田『諸葛孔明傳』、二八ページ。
- (八四) 内藤『諸葛武侯』、三六～三六ページ。「豊を従して城門校尉と爲す」（同五ページ）。
- (八五) 宮川『諸葛孔明』、十～十一ページ。
- (八六) 吉川『三国志』一九四三年八月二四日夕刊。
- (八七) 白河『諸葛孔明』、二五四～二五五ページ。
- (八八) 吉川『三国志』一九四三年八月二四日夕刊。
- (八九) 白河『諸葛孔明』、二五五、二五七、二五九ページ。
- (九〇) 「偉大なる平凡人」について、木村は、諸葛亮に対して吉川が語る結論だとし、この結論は読者の印象とは異なるのではないかと指摘している（木村一信「日本における諸葛孔明像（二）——明治以後——」『加地伸行『諸葛孔明の世界』（新人物往来社、一九八三年）』、一八〇ページ）。
- (九一) 吉川『三国志』一九四三年八月二八日夕刊。
- (九二) 白河『諸葛孔明』、一六三～一六五ページ。謹慎・忠誠・儉素の三要素は、吉川『三国志』も挙げる（吉川『三国志』、一九四三年八月二五日夕刊）。
- (九三) 曹操の生い立ちに関する記事も評伝に求めることができる。吉川『三国志』

志』には、次のような逸話が引かれている。

袁紹と戦ったとき、袁紹のために檄文を作った陳琳が、その文中に操をさして、
 「……（引用者注）彼の風采や趣好について）是を『曹操傳』の描くところに従つて云へば、——
 桃易ニシテ威ナク、音樂ヲ好ミ、倡優、側ニ在リ、被服輕絹、常ニ手巾細物ヲ入レタル小囊ヲ懸ケ、人ト語ルニハ戲弄多ク、飲ンデ大笑スルトキハ、頭ヲ几ニ没スル迄ニ至リ、膳ノ肴ヲ吹キ飛ばスガ如キ態ヲナス。（……）又彼が瘦せツばかりであつた証拠には、『英雄傳』の所載に、呂布が捕はれて操の前へ曳かれて來たとき呂布が、「公。何ぞ瘦せたる」と、揶揄したのに對して、操が言下に、「靖亂反正。わが瘦は、すなわち國事の爲なり」と、むしろ瘦を誇つてゐるやうな答へをなしてゐるのも分る（吉川『三国志』、一九四二年十一月二十日夕刊）。

これは、白河『諸葛孔明』の「三主傳對照」中の曹操の「家系及び出身」と「容姿」に対する記述と一致する（白河『諸葛孔明』、七〇～七二ページ）。『曹操傳』の記述は、杉浦・猪狩『諸葛亮』にも引かれているが、引用部の末尾が異なっている（杉浦・猪狩『諸葛亮』、一三〇ページ）。

(九四) 装丁は国立国会図書館所蔵の一八八五年、寛張栄三郎発行の和装本と同一だが、本文の版組は異なっており、また、綴じ直されているため、出版社、出版年は不明である。

(九五) 荳原宏一「『三国志』のころ」（吉川英治『三国志（二）』（吉川英治全集二七、講談社、一九六六年、月報））、四ページ。「馬上からバラリンズンと斬殺した人物を、後の場面で活躍させて、飛んだ失敗したよと、吉川さんが苦笑したようなお愛嬌もあった。」（同五ページ）とも回想している。荳原は、当時の新聞連載に「宮本武蔵」も含めているが、「宮本武蔵」の連載は、一九三九年七月に終了しており、『三国志』とは重なっていない（吉川英治記念館編『吉川英治小説作品目録 改訂版』（財団法人 吉川英治国民文化振興会、一九九二年））。

(九六) 吉川は七、八歳の時に、漢学を個人教授で身に附けたという（吉川英治『草莽寸心』（六興出版社、一九四四年）、七八ページ）。